



AFICS-JAPAN

Newsletter

第 13 号

2020 年 1 月 31 日発行

Mission Statement

国連システム元国際公務員日本協会
(AFICS-JAPAN) は、

- 国連システムの活動に協力します
- 会員のために必要な情報収集を行い、最新情報を提供します
- 会員相互の意見交換や情報交換のための交流会合を開催します
- 国際機関で働く人材育成を支援します

« 記事一覧 »

- 会長 年頭の挨拶
- 緒方貞子特別顧問ご逝去を偲んで
滝澤三郎
- AFICS-J 親睦会開催
- グローバル人材育成支援プログラム
活動状況
- 国連日本人職員会会長とお話
- 第 48 回 FAFICS Council
年次総会報告
- 会員便り：
深澤良信
世界災害語り継ぎの活動
- お知らせ：
第 9 回年次総会のご案内
会費納入のお願い
会員からの投稿募集

賀正 2020

年頭のご挨拶

会長 伊勢桃代

会員の皆様

新しい年が、ご健康とご多幸を齎しますようご祈念いたします。

先年には人材育成の事業を中心とした活動を行い、幾つもの小中高の学校をお訪ねし、生徒さんたちとの交流を重ねながら、国連で又国際的に働くことの大切さとおもしろさを伝えてまいりました。

早速ではございますが、私はこの度 2020 年 3 月任期終了をもちまして、会長としての役目から退かせて頂くことにいたしました。創設以来 8 年間、AFICS-Japan はもとより会長としての私も、執行委員、グローバル人材育成プログラムのタスクフォース、そして広く会員の方がたの意欲とご尽力に支えられて参りました。このような方々と一緒に、引退後に在りながら国連を次世代に直接伝える活動が出来たことは有難い事だと思っております。深く感謝いたします。こういったご報告はいささか時期尚早とは思いましたが、

次回ニュースレターが7月であり、又執行委員会の選挙も控えておりますので、ここにさせて頂くことにしました。

日本の将来はいろいろな不安に晒されております。国際的比較に於いても問題は多々あります。OECD報告に見られる教育問題、女性の地位の低さ、速度の速い人口減少等です。特に気にかかるのが日本人の国連も含め国際的無関心さです。次期会長、執行委員又メンバーの皆様が AFICS-Japan として日本社会の関心度を高めていただくことを期待しております。

2020 年 1 月吉日

緒方貞子特別顧問ご逝去を偲んで

AFICS-Japan の特別顧問であった緒方貞子様が 2019 年 10 月 22 日にご逝去されました。ご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

緒方様のご逝去を偲んで AFICS-Japan 会員である滝澤三郎氏（元 UNHCR 駐日事務所代表）より寄稿いただきましたのでここに掲載いたします。



緒方さんが亡くなった。最後に JICA 研究所でお会いしたのは、2 年以上前だったが、お元気そうだったので、訃報に接してとても驚いた。

初めて緒方さんにお会いしたのは 1981 年、私が初めての日本人職員として UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)に赴任した時だ。上智大学の国際関係研究所の研究室にお邪魔した時、小

柄な体で椅子にちょこんと座られて、「パレスチナ難民のために頑張ってくださいね」と励まされたことを思い出す。

20 年後、私は 2002 年に UNHCR のジュネーブ本部に赴任したが、緒方さんは 2000 年に高等弁務官を辞められていて、直接に上司として仕えたことはない。ただその頃はまだ緒方さんに薫陶を受けた幹部が残っていたので、緒方さんを懐かしむ声はよく聞いた。

当時の Deputy High Commissioner マリアヌは、「建物や施設管理も財務局長の責任範囲に入るから、入り口の前にある緒方さん退職記念の楓の木もあなたがちゃんと世話をね」と冗談ぽく言っていた。この楓は3メートルぐらいあり、私の部屋からよく見えて気にかけていたが、私が2007年に駐日代表で東京に来てからしばらくして枯れてしまったらしい。今あるのは植え直したもので、1メートルもないのが淋しい。

2002年の秋のニューヨーク出張の際に、回想録 *The Turbulent Decade* (邦訳：紛争と難民：緒方貞子の回想、集英社 2006 年)を書いておられた緒方さんを訪ねたことがある。机の上に、僕も当時読んでいた Jeffrey Pfeffer の *Power* (邦訳：権力を握る人の法則、日本経済新聞社、2011 年)の本が置いてあった。政治学者として、また国際機関のトップとして、「権力」のあり方に関心を持っておられるのだらうと思ったものだ。

駐日代表時代には、JICA 理事長をされていた緒方さんを時々訪問して難民支援や UNHCR のことで意見交換をしたり、難民映画祭などのイベントにも出席していただいたのだが、ひとつ、強く記憶に刻まれていることがある。2007年7月8日、難民問題に関する緒方さんのインタビューが *The Japan Times* に掲載された。その中で緒方さんは、難民受け入れに極めて消極的な日本(政府)の対応について、「Japan lacks humanity 日本(人)には人間らしい思いやりの心がない」と厳しく批判したのだ。きわめて強い表現なので、この言葉を緒方さんが実際に使ったのかと直接お聞きしたところ、この見出し自体は *Japan Times* の記者が付けたものだが、緒方さんは事前にそれを見て了解していたのだという。国際機関のトップを務めた人は通常、こういう物言いはしない。関係者に配慮し、外交的な発言を心掛ける。緒方さんは、外務省であれ法務省であれ、叱るべきは叱り、批判すべきは批判した。今でいう「忖度」はしなかったのだ。

Japan lacks humanity という表現には緒方さんの怒りがにじみ出ている。私は、三つの怒りがあったと考えている。一つ目は「日本人は世界の実態を知らなすぎる」という思いだ。世界には迫害や紛争で家を追われ、命の危険にさらされている難民や国内避難民が4千万人もいる。しかし法務省の難民行政に携わる職員を含め、大半の日本人はそのことについて無知で無関心だ。そのような状況への怒りがあったのだろう。



二つ目は「日本人さえよければいい」という心性への怒りだ。海外で事件や事故が発生した際「幸い、日本人の死傷者はいませんでした」といったコメントが放送される。日本人の安否を心配するのは無理がないのだが、同じ事

件や事故に巻き込まれた他の国の人々への思いが見えてこない。「日本人は自分たちの安全だけに固執する」とへの不満だろう。

三つ目は「日本人は損得勘定を考えすぎる」という不満だ。難民など寄る辺なき人々の人権や、人としての道義を重んじるより、「日本人に（経済的・社会的に）損か得か」を考える傾向への怒りがあったと思う。

緒方さんに触発されて、多くの日本人女性が国際機関に入り、彼女たちは「緒方チュルドレン」として UNHCR だけでなくいろいろな国際機関で活躍している。緒方さんのことは教科書にも載っているというから、今後も彼女の後を追う若者が出てくるだろう。緒方さんのレガシーは国際協力人材育成の分野にも残る。



緒方さんの時代に UNHCR に問題がなかったわけではない。研究者によっては、緒方さんは抛出国政府の意向に沿いすぎた、という批判をする者もいる。私の仕事（予算・財務）との関係でいえば、ポストと人件費の急増問題がある。緒方さんは現場によく出かけたが、過酷な支援の現場を数カ月の時限付き契約で転々としながら働く若手職員と、本部に多い恒久契約の幹部

の処遇の違いに気づいた。そして「UNHCR で働く職員はすべて同じであるべき」という考えのもと、時限付き契約保持者に恒久契約を出したのだ。これは当然ながら職員には歓迎されたが、その財政的影響は大きかった。緊急事態が起きるたびに採用された職員は、緊急事態が終了して抛出金が減っても解雇できない。10 年間に人件費の割合がじりじりと上がり、緒方さんが退職した 2000 年ごろには 40%を超えていた。収入が減っても人件費を削れないため事業費のカットをせざるを得ないなど、財政硬直化で財政危機につながり、職員への犠牲を伴う財政の立て直しは 10 年ほどかかった。良かれと思って導入された人事政策が組織の危機を招くことになったのだ。もっとも、組織の膨張と財政危機は緒方さんの責任というよりは、当時の内部管理担当の幹部の責任とすべきかもしれない。

かつては人道問題であった難民問題は、制御できない国際的越境移動の一つとして、今や国際問題になっている。「迫害」を恐れる比較的少数の難民を念頭に置いた 1951 年の難民条約体制は、数百万の「紛争」難民の大規模移動と長期滞留の前に機能不全となっている。難民問題は、トランプ大統領ら主導する「自国ファースト主義」、多国間主義の軽視の一因ともなっており、国連における「難民グローバルコンパクト」の合意にみられるように、「新しい問題」への「新しい解決」が喫緊の課題として模索されている。緒方さんが元気でいられたら、どのような解決策を示してくれただろうか？

偉大な足跡を残して逝かれた緒方さんのご冥福を心からお祈りしたい。

AFICS-Japan 親睦会開催

AFICS-Japan メンバー同士の親睦を深めるため、初めての親睦会を 2019 年 10 月 26 日 14 時から JICA 市ヶ谷ビル 2 階大会議室で開催した。出席者は 19 名で、国連退職後、何を考え、どのような生活をしているか、また国連と自分との関係についてなどを語り合った。会は伊勢桃代会長の司会の下、長谷川祐弘氏の話で始まった。長谷川氏は、国連を引退後の今、国連を外から見ること、内部にいた時とは異なり、国連をより広い視野から客観的に見るができるようになったと述べられた。そして退職後、どうしたら楽しい生活を送ることができるかを考えた時、常に人間関係の中に自分を置くことを好み、人と話しながら考えをまとめていく性格は変わらないので、国連を辞めたからといって国連と一切縁を切ることはできず、常に人と交わりながら世界で起こっている事に関与する人生を送っていると語られた。この後、出席者は次々と自分の退職後の生活について話した。

国連を退職後、大学で国連関連の分野で教鞭をとっている（いた）人、定年後住んでいる地域の環境保全のため活動する中で国連での経験を地域活動の中に生かしている人、国連会議を企画運営した経験を日本での市民活動の中で生かしている人、国際公務員育成研修へ講師として参加している人、など様々だが何らかの形で国連での経験を生かした活動をしている人がほとんどだった。外から国連を見るという観点では、国連組織の監査委員会のメンバーとして外から国連を見る仕事をしている人、また、外から国連を批判的な目で見つつ、原発反対や薬害防止などの社会運動に専念している人もいた。国連での経験で培った国際感覚を、内向きの日本のメディアや人々に対する啓蒙活動に生かし、社会貢献をしたいという意見もあった。丹羽敏之氏の著書『生まれ変わっても国連』についての話の後では、「自分は生まれ変わっても国連で働くだろうか？」と出席者たちは暫し考えさせられた。

また、国連退職後、本を出版、あるいは現在執筆中の人も複数名を数え、そのほとんどは国連関連や専門分野でのノンフィクション作品だが、中には SF 小説を執筆する人もいるなど AFICS-J メンバーの多才さが感じられた。趣味も多様で、熊野古道を歩くなど日本再発見の旅、魚釣り、ウィンド・サーフィン、推理小説を読む、などリタイア後の生活を楽しんでいる様子が語られた。その他、日本で開催されたラグビーワールドカップのボランティア体験談、農業を始め野菜はほぼ自給自足の生活談など、興味深い話が出た。

出席者の多くは国連での勤続年数が長かったようだが、国連以外での勤務が長かった人もあり、国連との違いなどに話は及んだ。最後のスピーカーの高島肇久氏は、長い NHK 勤務の後、UNIC 所長として 2 年間国連で働いた経験を、非常に貴重なものだったと話された。

会議室での話し合いの後、出席者はレセプション会場に移動し、軽食を楽しみながら暫し自由に歓談の時間を持った。（記録：佐藤純子執行委員）

グローバル人材育成支援プログラム活動状況



先ず、このプログラムのタスクフォースの名称を変更したことを報告する。これまでは、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）を支援することを主たる目的として、「SGH 支援プログラムタスクフォース」という名称であったが、文部科学省は高校生のグローバル人材育成のプログラムを SGH から World-Wide Learning (WWL)コンソーシアム構築支援事業や地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）という事業に移行しつつあるので、この機会に AFICS-Japan の強みを踏まえてタスクフォースの名称を「国際公務員育成タスクフォース」に変更した。英語は “Task Force on Education for International Civil Servants (EFICS)” とする。名称の変更は 12 月 5 日に開いた SGH 支援プログラムタスクフォース第 5 回会合で決定した。

活動としては、前号に報告以降の学校別アプローチでは、2019 年 8 月 28 日に開催された渋谷教育学園渋谷中学高等学校、校内 SDGs Talk 大会に箱山会員がコメンテーターとして参加した。また、2019 年 10 月 11 日には、岐阜県立大垣北高等学校での第 2 回グローバル講演会に高瀬委員が講演者として登壇し、高校一年生全員を対象に SDGs を紹介する講演を行った。高校生のフォーラムなどに関しては、2019 年 12 月 22 日に開催された「2019 年度 World-Wide Learning (WWL)コンソーシアム構築支援事業/地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）/ SGH 全国高校生フォーラム」では、文部科学省からの依頼により、井上委員、高瀬委員と箱山会員がポスターセッションの評価委員として参加した。2020 年 2 月 13 日～14 日に Global Academy 主催により鹿児島市で開催される第 5 回全国高校生国際シンポジウムには、主催者の依頼を受け井上委員と森田会員がポスターセッションの評価委員として参加する予定である。また、1 月 8 日にタスクフォースメンバーと JICA の広報室長、地球ひろば推進課長との会合を持ち、AFICS—J と JICA の協力の可能性について意見交換を行った。

今後の活動としては、名称の変更と共に、小学生から社会人・JPO までを対象に、幅広い範囲でグローバル人材育成支援の要請に対応することを決めた。また、要請を待っているだけでなく、自主的にイベントを開いたりしてタスクフォースの存在をより多くの人に知ってもらうよう努めるようにする。そのために、支援活動を紹介するリーフレットを作成し、ホームページの改良を図る予定である。（記録：高瀬千賀子執行委員、井上健執行委員）

NY 国連日本人職員会会長 高田実氏とのお話

高田実氏 プロフィール

北海道大学工学部修士号取得、三重大学機械工学科博士課程修了。

1998 年より UNDP 環境・エネルギーグループ、2006 年より同グループ持続可能なエネルギープログラム マネージャー。

2011 年より国連事務総長室上級アドバイザー エネルギーチーム

2018 年 NY 国連日本人職員会の会長に就任。

AFICS-Japan は 2018 年に国連日本人職員会会長に就任された高田実氏との会合を、2019 年 8 月 20 日 16 時から 18 時、国際文化会館で開催しました。出席者は 5 名でした。

その後、高田会長との連絡は台風 19 号の影響のため、電話によるお話となりました。高田氏のご努力により職員会の目覚ましい広がりを感じ、AFICS-Japan としても、できるだけ協力と活動への参加を目指していきたい、という意向をお伝えしました。高田さんからは、積極的な意向を伺いました。

（報告：伊勢桃代会長）

第 48 回 FAFICS Council 年次総会報告

第 48 回 FAFICS Council（元国際公務員協会連合会）年次総会は 2019 年 7 月 15～17 日、ウィーンの IAEA 本部会議室で開催された。委任状も含め世界中から FAFICS メンバーの 38 協会、63 名が出席し、AFICS-Japan からは佐藤純子執行委員が会を代表して出席した。また 7 月 14 日に Council に先立って開催された FAFICS 役員会には FAFICS Vice President として佐藤純子委員が出席した。

国連年金関連では、国連年金基金（UNJSPF）の Acting CEO/Secretary の Janice Dunn Lee 氏から、国連年金基金は健全な財政状態であることが報告された。国連年金投資に関する状況については、Representative of the Secretary-General (RSG), Sudhir Rajkumar 氏が、2018 年 12 月は 1931 年以來の厳しい状況で基金の総資産価値は 604 億ドルだったが、その後回復し、2019 年 6 月には

674 億ドルとなり、その後も上昇傾向にあり、長期的な実質利益率(the real rate of return)は目標の 3.5%を達成していると報告があった。

UNJSPF の組織に関しては、これまで CEO が年金理事会の Secretary を兼任していたのを改め、新たに Secretary of the Pension Board のポジションが新設された。

その他、FAFICS の分担金が 2020 年 1 月 1 日から、会員 1 人につき現行の US\$1.50 から US\$2.00 となることが合意された。

FAFICS の役員選挙では、会長、書記、財務役は候補者数と定員数が一致したため、会長に Marco Breschi 氏、書記に Pierre Sayour 氏、財務役に Wolfgang Milzow 氏がそれぞれ無投票で再任された。副会長職は定員数が 2019 年からこれまでの 7 名から 5 名に減り、マリ、スイス、ウイーン、ニューヨーク、バングルデシュの協会からの候補者が選出された。佐藤純子執行員は FAFICS 副会長職の満期となる 4 年目を迎え、立候補資格がないため、今回は AFICS-J からの新たな候補者は出さなかった。次回（第 49 回）FAFICS Council は 2020 年 7 月 13 日ー19 日、ジュネーブで開催の予定である。

（報告：佐藤純子執行委員）

会員便り

今号では、会員便りとして、深澤良信氏に投稿をお願いいたしました。深澤氏は元国連ハビタット福岡本部（アジア・太平洋地域担当）本部長（2012 年～2017 年）を務められた後、現在は、人と防災未来センター特別研究調査員・世界災害語り継ぎネットワーク（テルネット）事務局長として活動されています。

2020 世界災害語り継ぎフォーラムの開催と 「世界災害語り継ぎネットワーク（TeLL-Net）」

私は 2002 年から 2005 年まで神戸にある人と防災未来センター（<http://www.dri.ne.jp/>）に初代副センター長として勤務する機会がありました。そこでは、震災直後に広く市民から収集した震災に関する 16 万点にのぼる一次資料が保管されています。そして、そこから、破壊された街並みや避難所の状況を示す写真、発

災時間の 5 時 46 分で止まった時計、多くの関係者の証言など約 800 点が展示されています。そのような一次資料は、それに関係していた被災者や支援者の当時の心情を誠に雄弁に伝えてくれます。例えば、壊れた家の写真の傍らにそれを撮った人の心情を綴った短いメモが添えてあり、それによって、無念にも亡くなることとなった方の痛切な思いはもちろんのこと、現場に居合わせた人たちの気持ちも強く感じる事ができます。或いは 2 本の空のペットボトルが展示されていて、短いメモに「被災当日、水が足りないと伝え聞いた友人がバイクの荷台にペットボトルを 2 箱載せて長い時間かけて届けてくれた、その時のありがたさが忘れられない」とあるのを見ると、単なるゴミでしかない空のペットボトルであっても、それを通じて助け合いの大切さを心から感じる事ができます。すなわち、壊れた家屋の写真撮った人のその時の心の悲しみ、ペットボトルを届けてもらった人が大変な状況の中でこそ感じた感謝の気持ちが展示されているのです。



そのような心情に触れたとき、私たちは、平穏な日常を大切に生きる事がいかに重要なことであるかなど普段は余り思わないようなことに改めて気付かされます。あるいは、頭での理解に留まっていた防災・減災の知識を実践に移す大きなきっかけにもなります。語り継ぎを行なう方ご自身の心の復興にも資するものだとも言われております。

私は、センターでの勤務を経て、このような意味での語り継ぎが本当に大切であり、そのことを国内はもとより世界各地にひろく伝えたい、その意義をもっと考えてみたいと思うようになりました。被災地での語り継ぎが被災地の人々の心を復興に向けて奮い立たせてくれるきっかけのひとつになり、ひいては被災地の復興にも繋がっていくのではないかと思います、その事をいつか定量的に実証したいとも思っています（来世の課題ですが）。

2005 年には神戸で第 2 回国連世界防災会議が開催されました。そして、その時に会議場で出会った各国の人たち数人で「世界災害語り継ぎネットワーク（テルネット） International Network of Telling Live Lessons from Disasters (TeLL-Net)」を結成する事にしました。2010 年には阪神・淡路大震災 15 周年を記して第 1 回世界災害語り継ぎフォーラムを開催する事ができ、世界各地に思いを同じくして様々な形で

語り継ぎに取り組んでいる個人や組織が存在することが分かりました。2017 年に私は現役を退き、震災 25 周年にあたる 2020 年を見据えて、神戸の仲間たちと共に表記フォーラムの準備を開始することと致しました。そして、国際交流基金や兵庫県、神戸市だけでなく私の職場である西鉄や在阪神地域の民間企業などから多くの資金の助成を得て 1 月 24 日～26 日に無事開催する事ができました。

今回フォーラムの主要テーマは、風化に耐えて「災害の記憶をつなぐ」です。25 周年というのは震災体験の記憶を後世にしっかりと語り継いでいくための大きな節目の一つです。災害の語り継ぎでは「語り部」の皆さんによる story telling は大変重要ですが、それをずっと続けていくことはできません。しかし一方で、第 70 回国連総会で採択された「世界津波の日」の元になっている「稲むらの火の館」（和歌山県広川町）のように、1854 年の大津波の際に庄屋の五兵衛が自分の田にある刈り取ったばかりの稲の束（稲むら）に松明で火をつけること（五兵衛の機転と自己犠牲）で村人に早期に津波来襲の警報を発し多くの命を救った逸話を今に至るまで語り継いでいる事例もあります。いったいどうしたら 25 年を越えてその後も永く災害体験の記憶が語り継がれていくようになるのでしょうか。これは阪神・淡路大震災被災地だけでなく世界中どここの被災地にも共通する課題です。

今回のフォーラムでは日本国内外合計 20 カ国・地域から 60 名を越える参加がありました。自分自身で語り継ぎに取り組んでいたたりそれを支援する立場であったりする個人や組織の代表者、語り継ぎを研究対象としている研究者など、世界各地で様々な形で語り継ぎに関っている人たちです。また、フォーラムの成果を元に、今後約 1 年をかけて論文集を纏め上げて日英で出版することにしています。さらに、TeLL-Net を、災害体験の記憶の語り継ぎについて公式の場で発言できるような国際的な NGO として育成していきたいとも願っております。各国での語り継ぎ活動の支援にも踏み出せたらとも思っています。

最後に、震災前後に 2 度にわたって神戸に勤務できたこと、ジュネーブにあった当時の国連人道問題局に勤務して国際災害救援調整に関する機会を得たこと、総理府阪神・淡路地域復興本部で後日の人と防災未来センターの設立・運営予算の要求にほんの少しですが関る事ができたこと、総務省消防庁で日本の国際緊急援助隊の海外派遣に携わることができたこと、国連ハビタット福岡本部で 2013 年にフィリピンを襲った台風ヨランダや 2015 年にネパールを襲った大地震からの復興支援にかかわる事ができたこと、そしてそれらの全てが 2020 世界災害語り継ぎフォーラムの開催や TeLL-Net の設立に繋がっていることなど、多くの縁に感謝して、本稿を終ります。

（深澤良信 元国連ハビタット福岡本部（アジア・太平洋地域担当）本部長（2012 年～2017 年）
人と防災未来センター 特別研究調査員
世界災害語り継ぎネットワーク（テルネット）事務局長）

会員数：2020 年 1 月現在の会員数は 84 人です。

お知らせ

- **第8回年次総会のご案内：**

2020年3月23日（月）国際文化会館、午後 5 時半から開催予定。

総会17:30、講演「現場からの報告」 18:30

懇親会19:30（会費 8 千円）

最寄駅「大江戸線麻布十番」7 番出口から 5 分

☆今から予定表に記入しておかれるようお願いいたします。

- **2020 年会費納入のお願い：**

2020 年会費（5 千円）の納入をお願いします。

三菱 UFJ 銀行麹町支店（店番 616） 普通預金

口座番号 0 1 1 8 6 4 3

口座名義：アフィックス ジャパン（振込確認欄には会計担当者の名前が印字されます。）

☆前年度会費未納の方は、その分も合わせてお振込みください。

なお、年会費は年次総会受付でも納入できます。

- **会員からの投稿募集：**

AFICS-Jの中で共有したい情報（会員自身の著書出版やリタイア後のお話しなど）の投稿をお待ちしております。その他にもニュースレターで取り上げてほしいテーマやご意見がありましたら、AFICS-J事務局までご連絡ください。

事務局連絡先：afics.japan@gmail.com

ホームページ：<http://www.afics-japan.org>